

「ジカ熱」について

ジカウイルスによる感染症です。

蚊により媒介され、妊婦への感染では重大な問題が指摘されています。

流行地域は、中南米が中心（図 右）ですが、旅行者により日本国内に持ち込まれる危険性があり、「デング熱」の様に国内で感染が広がる可能性もあります。

日本では、海外で感染し、帰国後に発症する症例が、2013年以降に3例が報告（*）されていますが、国内で感染し発症した例はありません（2016年1月現在）。

ブラジルでは昨年に推定150万人が感染したと考えられています。WHOの予想では南米・北米の感染者が最大400万人に拡大するとされています。

*：2013年にフランス領ポリネシアで約1万人が感染し、この時に旅行者の日本人男女も感染しています。

3例目は2014年にタイ国のサムイ島に渡航した後、ジカ熱と診断された41歳の日本人男性です。東南アジアからの初輸入症例です。

ジカウイルスとは？

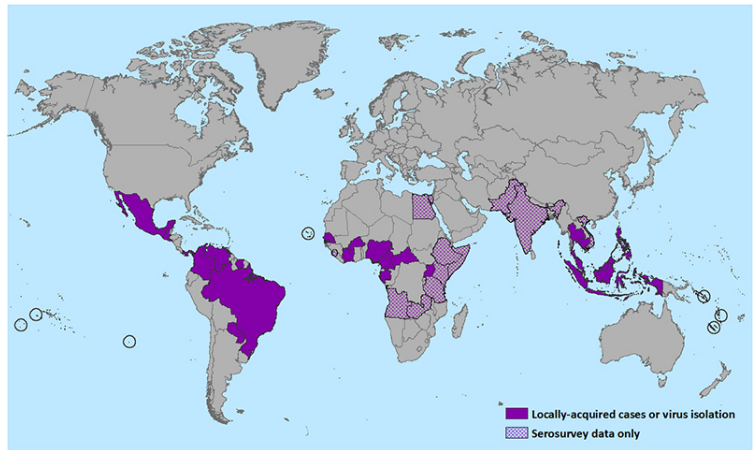
ジカウイルスは1947年にウガンダ（アフリカ）のエンテベ市の「**ジカ**の森」で捕獲されたアカゲザルでみつかったウイルスです。

このウイルスはデング熱、黄熱病、日本脳炎、ウエストナイル熱の仲間、蚊を媒介して伝播します。

「**ジカ熱**」では病気を媒介するのに、「ネッタイシマカ」「ヒトスジシマカ」などの蚊が関わっています。ウイルスは蚊の体内で増殖します。

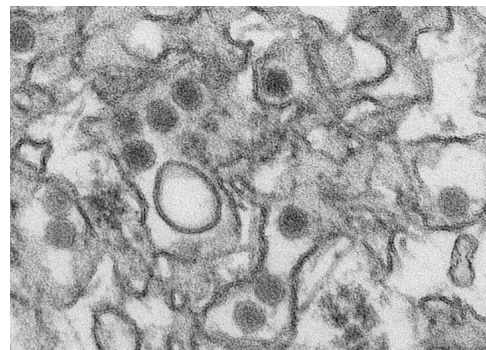
「**ヒトスジシマカ**」（「ヤブ蚊」属）（図 右）は日本にも生息しています。さらに地球温暖化にともない（?）、「ヒトスジシマカ」の生息地域が年々北上し、日本のほとんどの地域（秋田県および岩手県以南）に分布するようになりました。それに伴い「デング熱」の様に発生する可能性のある地域が広がっています。ただし、仮にそのようなことが起きたとしても、その蚊は冬を越えて生息できず、限定された場所での一過性の感染と考えられます。

一方で、米国に帰国した発症者と性交渉した相手にウイルス感染が確認されたことが報告されています。



図：ジカ熱の症例が報告された地域

アフリカ、中央・南アメリカ、アジア太平洋地域で発生があります。特に、近年は中南米で流行しています。



図：ジカウイルスの電子顕微鏡写真



症状

潜伏期間（曝露から発症までの時間）は明らかではありませんが、数日から一週間以上の場合もあります。

デング熱など他のアルボウイルス（節足動物内で増殖し、それらの吸血活動によって脊椎動物に伝播されるウイルスの総称）感染症の症状と類似しており、発熱、発疹（図 右）、結膜炎、筋肉痛、関節痛、倦怠感、頭痛などが起こります。通常、これらの症状は軽く、2～7日続いて治まります。ジカ熱に感染しても入院治療が必要になることはまれです。



8割では感染しても症状は出ないとされ、感染していることが多くの場合には発見されないため感染規模を正確にはかり知ることは困難です。

妊婦が感染すると脳の発達が不十分な「小頭症」（図 右）の子供が生まれることが問題となっています。



「小頭症」の発生は、2014年にはブラジルでの発症は150件以下でしたが、昨年10月以降に3893件（うち49人は死亡）が報告されています。

また、ギラン・バレー症候群（*）を起こす可能性も報告されています。

*：ギラン・バレー症候群（英: Guillain-Barré syndrome）は、急性・多発性の根神経炎の一つで、主に筋肉を動かす神経が障害され、四肢に力が入らなくなる病気。

特異的な臨床症状・検査所見が乏しいことから、診断のための検査は、血液からのウイルス分離、またはPCR法による病原体遺伝子の検出により行います。血清学的検査による診断は、ウイルスがデング熱、ウエストナイル熱、黄熱病など他のフラビウイルスと交差反応することがあるので困難です。

治療・予防

予防ワクチンや治療薬はありません。

痛みや発熱に対して解熱鎮痛剤を投与する程度にとどまることがほとんどです。

予防に関しては、日中に蚊に刺されない工夫が重要です。具体的には、長袖服・長ズボンの着用、昆虫忌避剤（DEET*を含むものが効果が高い）の使用などです。

また、妊婦あるいは妊娠の可能性のある女性はジカ熱の流行地への渡航を避けることが望めます。

WHOは、ジカ熱の国内での感染が確認されている国や地域を公表し、渡航する人には蚊に刺されないよう注意を呼びかけるほか、妊婦に対しては特に慎重に対応するよう促しています。

WHOのホームページによりますと、確認された国と地域は24に上り、南米のブラジル、パラグアイ、コロンビア、カリブ海諸国のドミニカ共和国、バルバドス、そして、中米のメキシコやエルサルバドルなど、広い範囲にわたって感染が広がっています。

一方、こうした国や地域を訪れて、その後、本国に帰って感染が見つかったケースも相次いでいて、各国は警戒を強めています。

感染が広がっているブラジルでのリオカーニバル、リオ オリンピック・パラリンピックの開催などの行事で感染はさらに拡大する要素を含んでいます。

* DEET（ディート）：化学名をジエチルトルアミドと言って、昆虫忌避剤として用いられています。蚊などの触角に作用する虫除け剤として、1964年に米軍が兵士用に開発されました。効能、効果が、蚊やダニやブヨやアブといった吸血害虫や、またその害虫が媒介する病気から防護するために非常に優れた薬剤として、現在スプレータイプやポンプタイプ、液体タイプやティッシュタイプなどいろいろな形態で広範囲に使用されています。殺虫剤や農薬ではなく、忌避剤という名称が用いられているために無条件に安全であると信じて不注意な使い方がされがちですが、稀に神経障害や皮膚炎を起こす報告があったために、アメリカやカナダ等の海外では、副作用などの報告を基に神経毒性など安全性についての再評価が行われ、特にカナダでは子どもへの使用について厳しい規制が設けられています。

図は、Newsweek 日本版、AFPBB News、国立感染症研究所、ELITE READERS ホームページから引用しました。

この「診療所だより」や診療についてのご意見・ご要望などをお気軽にお寄せください。
これからの参考にさせていただきます。

編集・発行： 勝山諄亮

勝山診療所

〒639-2216 奈良県御所市343番地の4(御国通り2丁目)

電話：0745-65-2631